

テーマ 3:『正義』の多義性と共生 解答解説

模範解答(設問別・3 パターン)

問 1(180 字以内)

- **解答 A(標準):** この思考法は、特定の勢力を悪役に仕立てて除去すれば平和が得られるという単純な図式に依存しており、われわれ自身に変化せず従来通りの生活を続けることを正当化する「知的な怠惰」に基づいているからである。実際には、一つの悪玉を打ち破っても期待が裏切られる歴史が繰り返されており、根本的な問題である多層的な利害や価値の対立を解消できないためである。
- **解答 B(論理重視):** 平和の問題が抽象的で困難であるため、人間は「悪役の除去」という単純明快な解決に酔い、知的労働を省こうとするからである。この方法では、闘争を通じて一時的に問題が解決したように錯覚するが、現実の国際社会における複雑な「力の体系」や「利益の体系」の衝突を無視しているため、結果として次なる悪役を生む連鎖から脱却できないのである。
- **解答 C(簡潔型):** 戦争の原因を特定の勢力に求め、それを血祭りにあげることで知的労働を省き、自らの変化を拒む態度だからである。悪を打ち破った善玉が期待を裏切り続けるという歴史が示す通り、この単純な思考では、国家間の力・利益・価値が複雑に絡み合った複合物としての問題の本質にたどり着くことができず、平和への道を閉ざしてしまうからである。

問 2(200 字以内)

- **解答 A(理論重視):** 国家は単なる力や利益の体系であるだけでなく、共通の行動規準や価値体系によって支えられた「価値の体系」だからである。この価値体系は歴史的に作られたものであり、世界共通ではなく国ごとに異なる特殊な「常識」として人びとの心に深く食い込んでいる。そのため、ある国の正義が他国から見れば誤りであることは稀ではなく、それぞれの国が固有の「特定の正義」を掲げることになるのである。
- **解答 B(構造理解):** 国家を分かちものが地図上の境界線以上に、言語や習慣に体现された「常識」の相違にあるからである。国家は、構成員を結びつける目に見えない価値の体系であり、それは歴史的背景によって多様な形をとる。国際社会はこうした多様な価値体系が並立する場であるため、唯一の普遍的な正義が存在するのではなく、それぞれの体系に基づいた複数の正義が緊張と対立を伴いながら存在しているのである。
- **解答 C(高度・俯瞰的):** 経済活動や軍事力という側面を超え、国家が人びとの精神を規律する「価値の体系」として存在しているからである。各国の「常識」は歴史的に形成された特殊なものであり、人びとの行動規準となっている。このように国家間の関係が利益や力の調和・衝突だけでなく、相容れない複数の価値体系の接触である以上、国際社会には必然的にいくつもの正義が、特定の正義として並立せざるをえないのである。

問 3(600 字以内)

異なる「正義」が並立する現代の国際社会において必要なのは、自らの正義を唯一の絶対的基準とする「知的な怠惰」を排し、他者の価値体系を背景から理解しようとする粘り強い姿勢である。

具体的な事例として、欧州等におけるイスラム教の宗教的象徴（スカーフなど）を巡る対立が挙げられる。これを世俗主義という「善」と、宗教的権威主義という「悪」の闘争として捉えるだけでは、問題は決して解決しない。ここにあるのは、近代民主主義が守ろうとする「政教分離の価値」と、信仰を生活の根幹とする「宗教的価値」という、異なる「常識」や正義の衝突である。

共生のために必要な第一の姿勢は、国家が力・利益・価値の三層からなる複合物であることを認識し、価値のレベルでの対立を、利益のレベルでの協力（経済的共生）や、力のレベルでの抑制（法制度による権利保護）によって調整する複眼的な視点を持つことだ。

第二に、相手の「正義」を安易に自らの価値観に同化させようとせず、対話を通じて「常識」の相違を可視化し続けることである。平和とは、対立が消失した静止状態ではなく、異なる正義が衝突する緊張を、暴力に訴えずに管理し続ける動的なプロセスである。自らの正義が「特定の正義」ではないことを自覚し、他者の価値体系との接点を模索し続ける知的労働こそが、共生社会の土台となる。

採点のポイント・解説

1. 問 1: 「知的労働の回避」と「自らの変化の拒絶」を理由として記述できているか。
2. 問 2: 国家を「価値の体系」と定義し、歴史的特殊性が複数の正義を生む論理を説明できているか。
3. 問 3: 共生を「緊張の管理」と定義し、他者の正義を受容（同化ではない）する姿勢を論じているか。